生涯学習センターだより

2025.1.9(木)　2024 年度第３号（１月号、通巻 42 号）　発行:秋田県生涯学習センター

令和6年度 秋田県生涯学習・社会教育研究大会 実施レポート

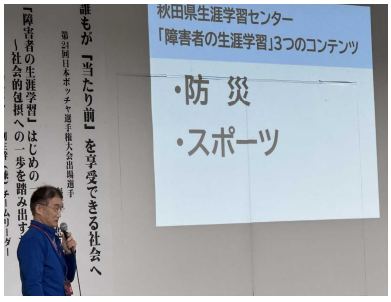
令和６年 11 月 12 日(火)、秋田県生涯学習センターを会場に、令和６年度秋田県生涯学習・社会教育研究大会が開催されました。県・市町村の生涯学習・社会教育主管課職員、公民館・市民センター等の社会教育関係施設職員、社会教育委員、公民館運営審議会委員、生涯学習奨励員、家庭教育支援関係者、学校教育関係者、社会教育士、社会教育主事有資格者等 93 名が参加しました。全体テーマは次のとおりです。

人づくり・つながりづくり・地域づくりの好循環を目指して
～ゆるやかなネットワークによる社会教育の充実～

午前は、ＮＰＯ法人はちのへ未来ネット代表理事の **平間 恵美** 氏が「つながりづくりで地域づくり！～すべての世代が共に学び、思いを共有できる地域づくり」と題して講演されました。平間氏は冒頭、はちのへ未来ネットは、「教育」「福祉」の垣根を越えて、横のつながりをつくることを目的に立ち上げられたことを説明され、活動拠点である「こどもはっち」の子育てサークルなどで行われている様々な活動について紹介されました。障害をもつ子どもの保護者からの声を反映させて学びの場をつくったり、高校生の放課後や週末の居場所づくりや「将来のママ・パパ」としての体験をする場をつくったりするなど、様々な体験の場づくりについて説明されました。それらは、参加した親子や高校生が、住んでいる地域で行われる様々な行事等に参加する際のハードルを下げたり、地域の中でたくさんの人々と関わったりすることが目標であることを強調されました。最後に平間氏は、社会福祉協議会との連携や公民館を核とした生涯学習・社会教育事業との連携について話され、地域の中では教育や福祉の垣根を越えて大人が手をつなぎ、その「ネットワークの力」で子どもと親の育ちを応援する「子育てから地域をつくる」を進めていくことが、幸せに暮らせる地域づくりを実現していく鍵であると締めくくられました。

午後は、第 24 回日本ボッチャ選手権大会出場選手であり、車椅子ユーザーでもある **齊藤 悠人** 氏が「誰もが『当たり前』を享受できる社会へ」と題して講演されました。はじめに、ボッチャ競技がもつ魅力について、シンプルなルールや投球法など、競技に「多様性」や「参加しているという実感」を感じることであると説明されました。また、車椅子ユーザーとして感じるバリア（社会的障壁）について述べられ、観光地やライブ、スポーツ観戦など健常者と同様に楽しみたいことがあっても、物理的・心理的なバリアによって、車椅子ユーザーには選択肢が限られることを話されました。その上で、多数派である健常者と少数派である車椅子ユーザーの数が、もし逆になったら、どうなるのかと会場に投げかけ、「ボーダレス（自分とは違う存在や考え方があっても当たり前）の意識をもつことができたらいいですね」と結び、自身の話が『誰かにとって少しでも「こころの障壁」を和らげるきっかけとなってほしい』とまとめました。

続いて、当センター副主幹（兼）チームリーダーの **柏木 睦** が『「障害者の生涯学習」はじめの一歩～社会的包摂への一歩を踏み出すために～』と題して発表しました。「障害者の生涯学習」を進める際、参加者に必要感のある「防災講座」、障害の有無にかかわらず一緒に楽しめる「スポーツ講座」、行動変容につながりやすい話合いの手法である「熟議」の３つのコンテンツを紹介しました。「場の大きさや人数にこだわらない」など、進める際に気をつけることを説明した後で、参加者同士の意見交流を行いました。様々な職種の方々による活発な話し合いが行われ、休憩時間には、会場に設置された体験ブースで、和やかな雰囲気で体験する姿も見られ、有意義な交流となったようでした。



令和６年度 家庭教育支援指導者等研修

年間テーマ：学校・地域の「つながりの力」で保護者と子どもをサポートしよう

当センターでは、市町村において家庭教育支援チームの中核となるチームリーダーと地域の人材として家庭教育支援チームの活動をサポートするサポーター（チーム員）を養成する事を目的として、本研修を実施しています。今年度行った研修の内容を紹介します。

第１回「学校・地域との連携で家庭教育を支えよう」（５月30日）

午前の当センター職員による講話・演習の後、午後は大仙・美郷教育支援センター「フレッシュ広場」スクールカウンセラー **菅原 由起子** 氏に、「スクールカウンセラーの役割と家庭教育支援チームとの連携の可能性」と題してお話しいただきました。菅原氏は、子どもは親子の愛着関係をベースに育つこと、安心・安全に包まれることで落ち着き安心感をもつこと、幼児期の育ち方が感情コントロールの発達の土台となることなどを話されました。最後に「心の健康は体（神経）から来る」「安心・安全を感じる時間を徐々に増やすことが大切」「大人も安心・安全に包まれる必要がある」とまとめられ、家庭教育支援チーム員としての気持ちのもち方に大きなヒントを与えてくださいました。

第２回「家庭での困り感や様々な課題に対応した家庭教育支援を進めよう①」（７月11日）

午前は、青森明の星短期大学准教授 **髙橋 多恵子** 氏に「保護者の声を聴くために大切なこと」と題してお話しいただきました。家庭教育支援は「感情労働」とも言われ、支援者側もケアされることが重要であると話されました。そして、参加者に「よき助言者になるより、よき理解者になれ」という言葉を贈られました。

午後は、秋田大学大学院医学系研究科助教、特定非営利法人光希屋(家)代表の **ロザリン・ヨン** 氏に「気軽にふらっと～不登校・ひきこもりへの支援の実際～」と題してお話しいただきました。後半の、講師によるデモ演示では、法人スタッフが利用者役を演じ、本番さながらの緊張感がありました。困り感を抱える方と「一緒に考える姿勢」について、より深く考えるきっかけとなる研修でした。

第３回「家庭での困り感や様々な課題に対応した家庭教育支援を進めよう②」（９月26日）

午前は、子どもたちのインターネット利用について考える研究会事務局の **髙橋 大洋** 氏が「子どもたちのネット利用に悩む保護者に伝えたいこと」と題して話されました。演習では、未就学児と小学生のネット利用上の困りごとに関するケース分析を行い、グループで協議しました。そして「親も学ぶ」ということに触れ、例として「子どもと一緒にゲームしてみる」ことも大切であると説かれました。参加者は演習を通して、誰もが踏み込んで考え、「これなら実践できる」と実感しているようでした。

午後は、能代山本特別支援教育統括コーディネーターの **加賀谷 勝** 氏に「発達に特性のある子どもをもつ保護者への支援について」と題してお話しいただきました。加賀谷氏は、保護者が話しやすい状況をつくるために効果的なポイントや、支援者が伝えたいことをできるだけ正確に伝えるための配慮点を紹介され、「保護者が答えを見つける支援」を実現してほしいとの期待を述べられました。

第４回「保護者と子どもを応援するために支援チームができることを考えよう」（11月21日）

午前は、岩手県教育委員会事務局中部教育事務所主任社会教育主事の **秋澤 美加子** 氏に「家庭教育支援を充実させる『つながりの力』」と題してお話しいただきました。秋澤氏は、「本」に関わる様々な立場の人たちが楽しみながら輪を広げていく「学校へ行ってみよう会」の活動を紹介されました。演習では、岩手の復興教育絵本を用い、「誰と一緒に」「どんな」支援ができるかについて考えました。参加者は様々な主体とつながりをもつことにより、これまでよりも一歩踏み込んだ新しい家庭教育支援ができる可能性を実感していました。また、参加者全員にこの絵本がプレゼントされ、参加者はそれぞれの立場での絵本の活用方法についてもイメージを膨らませていました。